



高知に赴任して7年が経過しました。高知に赴任前から継続している伊豆大島の発達障害支援も14年が経過し、高知赴任後のほうが長くなりました。県からの寄附で設立された寄附講座で、県の子どもの心の診療ネットワーク事業に携わるなかで、西は足摺岬（土佐清水市）から東は室戸岬（室戸市）、さらに四国山地の中山間地域まで、へき地・過疎地を含む広範な地域での支援にかかわってきました。

近年、高知県ゆかりの人物のドラマ化が増えています。NHKの朝ドラで、牧野富太郎氏や、やなせたかし氏が取り上げられ、さらに再来年には、土佐清水市出身のジョン万次郎氏が大河ドラマの主人公として描かれます。これまで高知県立足摺海洋館、高知県立牧野植物園や香美市立やなせたかし記念館アンパンマンミュージアムなどと連携し、神経発達症など感覚情報処理に困難さを抱える方々が安心して過ごせる「センサーフレンドリー」な取り組みを進めてきました。2026年10月から12月にかけて高知県立美術館、高知県立坂本龍馬記念博物館、高知県立歴史民俗資料館などで開催される「よさこい高知文化祭（国民文化祭）」に向けても、訪問前に見通しを立てるための「ソーシャルストーリー」の制作など、当事者が安心して参加できる余暇支援の工夫を行っています。障害のある人の社会参加を支えるには、医療のみならず文化・観光を含めた多領域の関係者の理解と連携が不可欠です。

また2024年には、森田療法の創始者である高知県香南市出身の森田正馬先生の生誕150周年を機に日本森田療法学会を高知で開始し、森田先生のご実家が国の登録有形文化財となりました。旧森田家住宅の保存活用に向けて寄附をしてくださった先生も本学会の会員のなかに多くいらっしゃり、今後は没後90周年にあたる2028年の一般公開に向けた準備が順調に進んでおります。将来的には、森田先生をモデルにしたドラマ化への期待も高まっています。

高知は、周囲の県と四国山地で隔てられ、四国四県のなかで唯一本州と橋でつながっておらず、「極上の田舎」をどっぴり味わえます。一方で、高知のへき地の子どもの診療にかかわっていると、坂本龍馬氏やジョン万次郎氏が

活躍した幕末や、長宗我部元親の戦国時代から意識が変わらないことを誇らしく語り、最近の発達障害支援に関する考え方を頑なに拒絶するような、こだわりが強く新規場面へ柔軟な対応が困難な保護者や祖父母世代が受診に同行することがあります。地方における少子高齢化の急速な進行に伴い、へき地の子育て世帯が物理的にも精神的にも周囲から孤立する「育児の孤立化」が深刻で、支援が届きにくく、へき地特有の課題や世代間・地域間の認識の差を痛感します。このような世帯は、インターネット環境はあっても、適切なインターネット・リテラシーを学ぶ機会がなく、「情報弱者」になりやすく、家族の特性に応じた適切な支援を十分に受けないままに、情報過多に振り回され、インターネットがらみのトラブルに巻き込まれる家庭も多数みかけます。全国的に中山間地域のへき地でも児童虐待は発生しており、なかには、命にかかわる最悪の事態に至り、マスコミを騒がせる深刻な事例も発生しています。地域特性に応じた支援の必要性を切実に感じます。

思春期以後に主に発症する統合失調症をはじめ、精神疾患の診断基準は外的表現型である精神症状を基盤になされ、社会状況に影響され時代とともに変化し、地域によっても異なる側面を有します。森田療法には「症状不問」という考え方があります。目に見える症状に過度に注意を向けてこだわりすぎると、それにとらわれてしまい、かえって症状が慢性固定化してしまう可能性があるため、その人がもつ特性（森田神経質）に応じた生活のあり方を整え、生活の質や社会生活機能の向上を重視する姿勢が強調されています。最近では、常同的な犯罪行動や児童虐待を繰り返す加害者にも、本人の認知特性、発達障害特性をふまえた対応の必要性が指摘されています。離島を含むへき地での支援にかかわると、都市部で生きづらくなった人が移住する事例を多数みかけます。今後、へき地の特性に応じた支援のあり方を模索・実践していくためには、医療、行政、文化といった多様な領域の専門家や地域住民の深い理解と協力が不可欠です。

高橋秀俊